

〔3〕和歌

龍馬は又和歌にも相當の技倆を有つてゐた。勿論師に就いて學んだ譯ではなかつたが、父の直足、母の幸子は共に和歌に堪能であつたといふから、不知不識學び得たものであつたらう。龍馬の作として残つてゐるもの數首を左に擧げる。

文ふみひら開こもく衣ころもの袖そではぬれにけり

海うみよりふかき君きみが御心みこころ

世よの人はわれをなにもいはゞいへ

わがなす事ことはわれのみぞ知る

春はるくれて五月さつきまつまのほととぎす

初音はつねをしのべ深山みやまべ邊へのさと

人心ひとこころけふやきのふと變かはる世よに

ひとりなげきのますかゞみ哉かな

短夜みじかよをあかずも啼なてあかしつる

心こころかたるな山時鳥やまほととぎす

湊川みなとがはにて

月つきと日のむかしをししのふ湊川みなとがは

ながれて清きよき菊きくのした水みづ

明石あかしにて

うき事ことをひとり明石あかしの旅衣たびころも

磯いそうつ浪なみもあはれとぞ聞きく

淀川よどがはを溯さかのぼりて

藤ふじの花はな今いまをさかりに咲さつれど

船いそがれて見返りもせず

泉州田川の名産引白を詠む

引白の如く上下たがはずば

かゝる憂きめに逢はまじものを

嵐山に遊びて

嵐山夕べさびしく鳴る鐘に

こぼれそめてし木々の紅葉

大政奉還の時

心からのどけくもあるか野べはなほ

雪げながらの春風ぞふく

桂小五郎に興ふ

行く春も心やすげに見ゆるかな

花なき里の夕ぐれの空

〔4〕都々逸

龍馬の作として傳へられてゐるものに、都々逸がある、眞偽は保證が出来ぬが、眞とすれば、前掲の和歌などよりも遙かに優れたもので、世の都々逸中에서도傑作たるを失はぬ。

何をくよ〜川端柳

水の流れを見て暮す

咲いた櫻に何故駒つなぐ

駒が勇めば花が散る

二つとも最も人口に膾炙したものである。

史傳 修養 坂本龍馬言行錄終

大正六年四月一日印刷

大正六年四月四日發行

修養史傳 坂本龍馬言行錄 第十一編

定價金四拾錢

正價金參拾五錢

著者 川又慶二

發行者 伊東芳次郎
東京市牛込區神樂町一丁目一番地

印刷者 藤澤松次郎
東京市小石川區西江戸川町二十一番地

印刷所 江戸川印刷株式會社
東京市小石川區西江戸川町二十一番地



發行所

東京市牛込區
神樂町一八一

電話番町五三七六一七一
振替東京一七一

東亞堂書房

第四編

德川家康言行録

百目木劔虹先生著

江戸幕府三百年の基礎を定めたる東照公の言行は一冊に盡して餘蘊あることなし彼が悠揚迫らず焦らず成功を後日に期せし大志學ぶべく欽すべし。

第五編

吉田松陰言行録

武田鶯塘先生著

松陰は幕末達眼の士なり其身は小塚原に死せしと雖も彼が大節は毅然として子弟の腦底に傳はりよく維新回天の業を成就せしめたり。

第六編

新井白石言行録

藤森花影先生著

徳川幕府の大儒白石先生の言行描きて漏らさず勤勉篤學の先生の面目は紙上に躍如たり正に之青年修養の好模範なり。

第七編

貝原益軒言行録

上田南人先生著

益軒先生の訓言は實に天下の至寶なり先生は實踐の人躬行の人言々行々悉く他を益せしむ益軒の名空しからずと云ふへし。

第八編

佐久間象山言行録

笹井花明先生著

開國の偉人先見の英雄象山佐久間修理は山國信濃の生みたる大器也笹井先生平生崇拜の餘椽大の筆を呵して此の熱血文字と成る。

第九編

勝海舟言行録

淺海琴一先生著

幕府の海軍奉行として又江戸城明渡しの大立物として更に政府の一快傑として其言行の傳ふべきもの多き海舟先生の面目を見よ。

第十編

水戸黃門言行録

笛岡清泉先生著

水府第二代の英主黃門光圀は英明の資謹嚴の性風に尊王愛國の氣を鼓吹して史局を起し楠公の碑を建つ幕府稀世の人傑也。

第十二編以下目下印刷中に有之逐次刊行す。

福本日南先生著

黒田如水

大判美本約三百頁
正價一圓五十錢
送費十二錢

(國民新聞批評) 戰國英雄中の異彩小東照公如水一生の行動を其心事まで立ち入り縦横自在に解剖し来る如水は著者同郷の偉人之を描くに史的材料の豊富なると例の奔躍飛ぶが如き快筆を以てす油の乗りし好史傳たるや論無し。

福本日南先生著

増補 直江山城守 改版

大判美本二九〇頁
正價一圓二十錢
送費八錢

(萬朝報批評) 石田三成と川約して天下を一匡し、家康を併して太閤の舊業を保せんとして人事を盡し、敗後祿を他に頼つて晩年を風月に嘯きたる直江兼續の一生は飽くまで勇ましく清く高し、日南これを日本男兒の典型として天下に紹介す、行文烈々、字々火を噴く、讀者をして兼續たらしめずんば止まざるの勢あり、痛快の著なる哉。

IL9D30





